『新しい学校』一九五五年十一月（興文館）

視聴覚教材利用の根本問題

矢口 新

(一)

学習活動において、教材の占める地位は重要である。殆んどすべてであるといってもよいと思う。それは次のようなことを考えてみればよくわかるであろう。

社会科などで教科書学習などといわれて、とかく批判的になっているが、現実には、教科書を使って学習が行われているし、それに全然依存しているといつてよい。それを読んで、理解してゆくという学習が殆んどすべてである。教科書というのは、教材を盛った器である。その中には、社会のことについて、書かれてあるのである。その書かれてある内容は、教材である。こういう教材が教師と、生徒の間にあるということが、学習活動を決定しているのである。言葉によって社会のことが書かれてあるから、子供はそれを読んで理解しようとするのである。教師はそれを説明しようとする。そうして学習活動が或る方向に動いていく。教材として、教科書に盛られたもの以外に何も提出されなければ、如何に教科書学習を切りかえようとしても、そこには、読んで理解してゆく活動以外に行いようがないのである。現在の社会科が依然として教科書学習であるのは、教科書以外の方式で、教

材が提出されないからである。

このように教材というものが、学習活動の方式を決定しているのである。

所で、教材というものについて、われわれは、読んで理解するものだという考え方が非常につよいのである。言いかえれば、教材というものには、教科書のような形で提出されたものだという誤解がある。これが社会や自然について学習させる場合に、本質的な教材を提出しようとする最も大きな原因となっているのである。この事について次に考えてみよう。

まず国語の教科書を例にとってみよう。国語では、よみ、かき、話す、聞くなどといういろいろな能力が養われなければならぬが、今ここでは、読みのことについて考えてみる。読む力がつくために如何なる教材が与えられなければならないかといえ、それは読む教材である。読むことを通じて、読む能力がつくのである。読むものを教材として与えることとなれば、それは、今の教科書のようなものがすぐ思い浮べられるであろう。従って、読む力をつけるためには、読む教材をもった教科書をうんと読んで、読む力をつけるようにしなければならぬ。教科書をそういう風に使わなくては、読む力はつかないということである。くりかえし、くりかえし読み、読むかたわらからどしどしわかるように、すらすらと読めるようにする。

こういう学習の仕方は、教科書学習といってもよいであろう。読む力をつけるためには、教科書学習こそ最もよい方法なのである。

国語におけるこういう教科書の使い方は、他のあらゆる教科に、影響を与えている。そうして、社会や自然の教育でも、まるで国語の教材を読むように読ませている。そしてそれが読めるようになって、中味の解釈をすると、社会や自然の学習が出来たかの如く錯覚をもつ。

この錯覚は中々抜けきれない。そこに問題があるのである。

国語では読む力をつけるといったが、社会や自然では、それに当るものを何と叫びたらいよいよであろうか。それは自然を見る力、社会を見る力とでも言うべきであろうか。或はよむという言葉と比較的に使えば、社会をよみとる力ということであろう。そこで、それを養うに必要なのは何かといえば、国語の読みの場合と同じように考えれば、自然や社会そのものが教材とならなければならぬということになる。即ち読む力は、読むことによってつくから、その読む為の対象を教材として提出して読む練習をさせるのである。自然を見る力、社会を見る力は、自然や社会を見ることによってつくのであるから、その見る為の対象である自然や社会を教材として提出して、見る練習をさせる必要があるのである。こう考えると、社会科や理科の教材は、国語と同じ形で提出する事は出来ないということがわらう、つまり教科書学習ではだめだということである。

この場合、教科書の形で提出された社会や自然の学習教材はどういう意味をもっているであろうか。国語の場合とは全く異った意味をもっているのである。それは、国語の場合のように、それにぶつかって、練習するという教材ではない。ぶつかって練習する為の対象は、社会や自然ではなく、自然そのものであり、社会そのものでなくてはならない。教科書の形をとった、即ち言葉を中心にして書いたものが内容になつてゐる教材は、それではどういう位置づけをしたらよいか。それは第一義的でなく、第二義的である。だが第二義的というのは、どういうことであろうか。次にそのことを考えてみなくてはならぬ。

(二)

ここで一つの比喩をあげてみよう。自然を写生する画家の勉強法の

ことである。画家が描く当の対象は自然の静物であり、風景である。彼は当の対象を描くことによって、自然が描けるようになるのである。だが多くの画家はその初歩においては、模写とすることをやるのである。この模写というのは、先輩のすぐれた眼によって描かれた自然の写生をうつすのである。そして自然のうつし方をまねるのである。つまり写されたものを模写して、写す場合の手法を身につけるのである。これも一つの勉強である。しかしそれはまだ自分の眼で自然を見て、自分の技術で自然を描いたことにはならない。その準備をしているのである。それを土台にして、自分の眼を使い、自分の手で自然を描いて、そこで自分の力で自然を写生をしたことになるのである。

この画家が、自然を写生する画家となるために、二つの教材が使われていることがわかる。一つは、第一義的な教材としての自然であり、第二義的には、先輩の写生したものである。この場合写生されたものを描くことにより、彼は他人の見方や描き方を習っているのである。それを通じて自分の見方や描き方を次第につくりあげてゆく、しかしそれは最後には自然そのものに向かったときに本当に洗練されるのである。

自然や社会の学習においても、以上のようなことが考えられる。われわれが自然や社会を学習するということは、自分の眼で自然や社会が見られるようになるということである。そのためには第一義的には自然や社会を相手にしていかなくてはならぬが、それにはまた、先輩が自然や社会を見た結果にふれて、そこで見方をならうのである。丁度画家が先輩の写生を模写するように。社会や自然学習における教科書は丁度、先輩の写生に当るのである。教科書に書かれていることは、自然や社会を見た結果なのである。それは読む子供から云えば先輩に当る大人が見た、即ち写生した結果なのである。写生する時には、絵

の場合もそうであるように、写生をする人の眼によって、整理されているのである。

この写生されたものが、言葉を通して表現されたのが教科書であるが、それをただ読んでいるということであっては自然や社会を理解したことになるので、どういう自然を、どういう社会を、どのように描いてあるのかと、いつも、現実の社会、自然との関連において、教科書の表現を問題にしてゆかなければならぬのである。そうでなければ、唯先輩のみた通りを、そのままのみにしているということであり、しかも、それが言葉だけでうのみにされているのでは、殆どナセンスなのである。それでも子供が多少とも理解してゆくのは、子供はただ教室で勉強しているだけでなく、学校外の家庭生活や社会生活で、具体的に経験して、自然や社会をみているから、自分でそれをおぎなうて、教科書に書かれたことを、自分なりに了解してゆくのである。だから学校で教科書を読んでいるだけであつても、子供は自然や社会を見てゆくことが出来るようになってゆくのである。

所が教育の側から云えば、一番大切な現実の自然や社会と、教科書に表現された写生とを結びつける所に殆んど手が加らないか、或は極めて弱いということは、教育をしていないといつてもよい位である。一番大切な所を、子供にまかせておくということである。教科書学習ではいけないということはこのことなのである。

社会科や理科で教科書学習をやれば、それは、丁度画家が模写ばかりやっているようなものである。それを抜けれなければ、模造品をつくって、金をもうける画家にでもなるであろう。人の見た社会をただ本で読んでいるのでは、人の言葉を信じているだけである。つまり信仰していると大してかわりがないことになる。

正しいことだから信じてもよいではないかという人がある。しか

し問題は教科書にあることが誤っていると、正しいとかいうことではないのである。教科書の言葉それ自体は正しくもなければ誤りでもない。言葉だけで何かが理解されたとか、正しいとかいうことが言われることが問題なのである。要するに空虚な世界に住んでいることなのである。それでは生活する力とはならないのである。水は酸素と水素の化合物であるという言葉だけを知つていても、それがただの言葉だけでは、何の意味もないのである。その事実にあつて、それを見てつかんでいなければ、知らない方がましなのである。そういう空虚な言葉にとらわれる考え方が、現在のわれわれの生活の中に多すぎる。とくに教育において、そういうものがどれだけ、人間を本当につくることを妨げているか分らないのである。そういうものに対する迷信があるから、本当の教育が行われないのである。

社会の学習においてもそういうことが多い。若し九州という言葉だけを知つて、その内容を全然知らなかったら、知らない方がよいのである。三才の子供でも九州という言葉は云う。しかしそれは隣の家との区別さえついていないのである。ということは、九州ということを知りたくなくてもよいということでない、それを教えるということは、われわれの生活の中の事実として、事実の関連を把握させることだといふことを言っているのである。そこには人間が住んでいて、やはり同じ生活をしている場所だといふそれでもよい。そういう事実認識があることが学習になるといふことなのである。

さてこのように考えると、自然や社会の学習で、社会の現実を子供の前に提出するということが如何に大切かということがわかるであろう。何々を理解させるなどということは、すべて、何の教材を提出してするのかということを考えることが大切なのである。教科書に、これは、こうなっていますと書いてあることを読ませれば、そのこと

が理解されたと考えるというのは、見当外れなのである。そういう考え方の習慣を教師は打ち破らなければならないのである。

(三)

視聴覚教材の利用ということが云われるけれども、一般的に、視聴覚教材を利用したらよいなどということは、殆んど意味のないことである。とくにこの場合は、とかく映画、幻燈、放送などが考えられているが、そういうものをただ道具として使えば、教育になるという考え方は、考え方そのものとして、おかしいことであろう。

大切なことは、子供に何を理解させようとしているかということであり、そこに何が教材として必要かということである。その所で、教科書に言葉で書かれたことが、読まれて、おぼえられればよろしいと考えられているならば、映画を見せようが、幻燈を見せようが何にもならないのである。第一見せもしなからうし、また見せれば、多少はよいと思う人もあるけれども、せいぜい、その程度であろう。なんとなく見せるということである。見ないよりはましだが、それで時間を食うことを考えれば、他に色々教育することはあるから、全体的に考えれば、見せない方がより教育的だと考えるのである。この考え方は、やはり理の当然という気がするのである。

学習における根本問題が反省されず、どういう目的を以て、何を教材として提出するかが殆んど等閑視されて、ただフィルムだけを問題にし、それを集めることに狂奔しても意味がないではないか。ただ放送の施設を備えてみても何にもならないではないか。見せたり、聞かせたりしている中にわかって来るといわれるが、わかるためには、やはり、そういう面からの研究と反省が行われなければならない。所が、視聴覚教材の利用ということ云って、そういう根本問題は反省さ

れたことがないのである。

われわれは社会や自然の勉強をさせることが教育上重要だと考えているのであって、映画を見せることはその手段ではないか。その映画をどう見せるか、導入で見せるか、展開で見せるかなどということはどうでもよいことである。所が視聴覚教材の利用といえ、そういうことが問題になるのである。

一つの学習で、この教材が何故ここで、こう使われたか、この学習はどういう教材を使うべき学習なのか、こういうことが研究されなければならぬ筈である。所が視聴覚教材利用というと、この視聴覚教材はどう使うか、いいか悪いかなどということを問題にすることだという雰囲気がある。その時には、学習のねらいのことはすっかり忘れているのである。問題にしている人の主観で、映画を問題にしているのである。そういうことはやめにしなければ、本当に教材を使うようにならないのである。

教材は教材それ自身として意味があるのでない。教科書でも、教師の学習の仕方に適当した教科書が選択されるべきだというように学習が教材をえらばせるのである。学習から教材を考えて来ることを考えないで、学習からはなれて、ただ一般的に教材を問題にする習慣をつける、教材にひきずり廻される教育が出現するのである。教科書学習が現に行われているのは、学習がどういう学習であり、それにどういう教材が必要であり、その教材の中で教科書はどこに位置づくかということが考えられていないから、教科書に引きずり廻される学習になるのである。

そこへまた視聴覚教材の利用などといって、映画や放送に引きずり廻される学習が実現するのではやり切れないではないか、教育の自主性がなくなるのである。